

ブリヤ=サヴァラン『味覚の生理学』における「味覚」
— 〈génésique〉という概念をめぐる—

浦上祐子*

La notion de «goût» dans la *Physiologie du goût* de Brillat-Savarin
— Autour du rapprochement entre le concept de « goût » et celui de « génésique »—

URAKAMI Yuko

Résumé

Le sens « génésique » dont le but est la reproduction des espèces est étroitement lié au « goût » dans un texte de *Physiologie du goût* de Brillat-Savarin. Le mot « génésique » est un néologisme de Brillat-Savarin dérivé du mot « genèse », et il a pour sens original le concept de « Création et Élaboration ». Partageant ce même concept avec le goût, les deux désirs les plus animaux contribuent non seulement à la reproduction des espèces et à la conservation de l'individu, mais aussi à la naissance de la civilisation, des sciences plus raffinées, plus ingénieuses, plus esthétiques qui caractérisent l'espèce humaine. Il décrit le goût comme un sens profondément lié à l'intelligence humaine. L'âme, l'apanage de l'homme, joue un rôle important. Les sensations reçues y sont réfléchies, comparées et jugées, et de là naît un plaisir plus délicat propre à l'espèce humaine qui doit être bien distingué de celui de l'animal. Brillat-Savarin qui a vécu au siècle des Histoires naturelles, essaie de démontrer la supériorité de l'homme par les facultés intellectuelles ayant rapport au goût, et il décrit donc l'ordre de la nature en proclamant l'homme comme « le grand gourmand de la nature ».

Keywords : Brillat-Savarin, *Physiology of Taste*, goût, génésique, Buffon

1. はじめに

1825年に出版されたブリヤ=サヴァラン (Jean-Anthelme Brillat-Savarin, 1755-1826) の主著『味覚の生理学』(*Physiologie du goût*, 1825)¹は通常フランス食文化の文脈で論じられることが多いが、本論はこの作品を思想的文脈で捉えて論じようとするものである。一般に、人間には視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の5つの感覚が備わっているとされている。だが、ブリヤ=サヴァランは人間の感覚は「ジェネジック」(génésique) という感覚も含めて6つとすべきと主張する。²「肉体愛」(amour physique)とも言い換えられるこの感覚は「両性を引きつけ、種の繁殖を目的とする」³もので、いわゆる人間の性的な感覚のことを指している。注目すべきは、ブリヤ=サヴァランがこの感覚をとりわけ重要な存在とみなして味覚と密接に関連付けて論じていることである。本論では、当時の思想的状況を視野にいれながら「ジェネジック」の概念を検討することによって、ブリヤ=サヴァランが味覚をどのようなものとして捉えていたのかを明らかにしたい。

キーワード：ブリヤ=サヴァラン、『味覚の生理学』、味覚、ジェネジック、ピュフォン

*平成23年度生 比較社会文化学専攻

2. ビュフォンの言説から

ジェネジックがどのような概念かを検討するにあたって、はじめにプリヤ=サヴァランの次の言葉に注目したい。

これほど重要な感覚が、ほとんどビュフォンに至るまで正当に評価されていなかったこと、触覚と混同、いやむしろ付属させられていたとは驚きである。⁴

これはビュフォン (Georges-Louis Leclerc, comte de Buffon, 1707-1788) が1749年に出版した『博物誌』に収められた「人間の博物誌」における「感覚一般について」という章の最後の部分の記述を指しているものと思われる。そこでは「創造時の最初の人間」⁵つまりアダムがはじめて視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚にめぐめていく様子が描かれている。諸感覚を通して彼は外界の事物や自己の存在についての認識を獲得していくが、やがて眠りに落ち、すべての思考は中断される。目覚めるとそばに自分に似た存在 (イヴ) を発見し、その身体に手を当て他者と知る。その心地よさに驚きながら「六番目の感覚器官が生まれる」⁶のを感じると、アダムはようやく自分の存在が完成されたと思うのである。ジェネジックを含めて人間の感覚を6つとすべきとするプリヤ=サヴァランの概念はあきらかにこの章から得られている。そもそもプリヤ=サヴァランにとってビュフォンはその文章を暗記するほど好きな作家のひとりであった。⁷ビュフォンは学術的権威をもって人間の性に対する概念への変革を試みた人物である。彼は「人間の博物誌」における「思春期」の章で思春期と結びつく割礼、去勢などの残酷な風習を避けることなく記述したが、こうした風習を可能とする人々の人間の性に対する偏見に対し、「文体に節度をもたせる思慮深い慎みをもってこれらの詳細を検討し、表現に感情をまったく持たない、用語にその単なる意味だけを与える、あの哲学的な冷淡さをもって、我々自身が見た通りのものとしてのそれらを示す努力をしよう」⁸と、文体に工夫を施すことよって対抗した。キリスト教に抑圧された恥ずべき性でもなく、扇動的に語られるわいせつな性でもない、博物学的な無表情さをもって人間の性を語ることによって、ビュフォンは人間の身体的欲望を自然なもののみならず人々の視点を養おうと試みたのである。⁹人間の性を自然なもののみなし肯定するビュフォンの思想はプリヤ=サヴァランにも引き継がれている。『味覚の生理学』の「諸感覚の働きの目的」¹⁰という節は、先述のビュフォンのアダムとイヴの文章をプリヤ=サヴァランが自己流に書き換えたものであるが、彼はここで人間の性的欲望と性生活を自然の要求とみなして次のように肯定的に記述する。「人間は自己の存在をわかちあおうという要求を感じる。積極的で、不安で、抗いがたいこの感情は両性に共通のものである。(…)種の存続を確かにしつつ、その最も聖なる義務を果たした。」¹¹と。だがプリヤ=サヴァランは、人間の性的欲望を単に自然なもののみならず肯定するにとどまらず、さらにその概念を極めて壮大な視野で捉えて称揚するのである。この点を次に詳しく検討する。

3. ジェネジックにおける創造と生成の概念

まずは「ジェネジック」という語そのものに検討を加えたい。『トレゾール』(*Le Trésor de la langue française informatisé*)によると、ジェネジックの定義は「両性の結合による生殖と性行動に属するもの」、語源は「1825年 (プリヤ=サヴァラン)、派生 (genèse)」¹²とされている。つまりこの語はプリヤ=サヴァランの造語なのである。プリヤ=サヴァランは『味覚の生理学』の序章で、ある表現を必要としながらもそれがフランス語にない場合、他言語から借用したり新語を創ったりするネオログを公言している。¹³すなわち彼が新語を作成したということは、この概念を表現する言葉がフランス語になかったことを示している。彼がこの感覚の重要性を「種の繁殖」だけにみているならば、(sens reproductif)(繁殖感覚)とできたはずである。しかしそうしなかったのは彼にとってこの感覚は繁殖のためだけのものではなかったからであろう。一方で (sens sexuel)(性的感覚)ともしていないことから、彼にとってそれは性的快楽といった単純な概念でもないことがわかる。ロベールの『フランス語歴史辞典』(*Le Dictionnaire historique de la langue française*)によると、彼がジェネジックの語源と

して用いた〈genèse〉は、ブリヤ=サヴァランが生きていた当時においては、天地創造の過程を記した『旧約聖書』の「創世記」を意味するか、その他には生物学的な「種の生殖（1660年以降）」や、技術的な「幾何学の図形の形成（1721年以降）」といった概念を指していた。1849年以降は「あるものやある思考を入念に造り上げたり練り上げたりする」という生成の概念も派生している。¹⁴これらを考慮すると、ブリヤ=サヴァランがジェネジックという語に「創造と生成」といった概念をこめたことが考えられる。実際、後述するように、ブリヤ=サヴァランのジェネジックは、単に生命を創造するのみならず、より複雑で高尚な人間の文明や文化を創造し、それによって人間の社会を生成していく感覚として描かれている。このことを理解するために「諸感覚の使用」¹⁵の節に記された文章をみてみたい。ここでは人類は先述したビュフォンの「創造時の最初の人間」のように「存在し始めた最初の時期」¹⁶におかれ、「ぼんやり見、不明瞭に聞き、見境なく嗅ぎ、味わずに食い、荒々しく性を享樂した」¹⁷と想定される。だが諸感覚は、次の一文にあるように「人類だけの属性」である「精神」によって「反省、比較、判断」がなされ互いに協力してその機能を改善させていく。

すべての感覚は、人類だけの属性(attribut spécial de l'espèce humaine)であり、常に完全をめざす精神を中枢(centre commun l'âme)にして、反省、比較、判断させられる。そうしてやがてすべての感覚は感覚する自我つまり個人の利益や幸福のために相互に協力させられる¹⁸

そして人類は進歩に導かれるのだが、その要因は「我々の諸感覚が常にかわるがわる快く満たされようとする要求」¹⁹にあるとされている。例えば視覚が絵画や彫刻を生み出し、聴覚が旋律や調和を生み出すというように、諸感覚が快を求めることによって人間に洗練された「文明」(civilisation)がもたらされていく。ジェネジックもロマネスクな恋愛、コックトリー、モードなどの洗練された文明を生み出すが、これらは特に「現代社会の3大原動力」²⁰と位置付けられている。つまりこの感覚はとりわけ社会を前進させる力があるとみなされている。さらにジェネジックは「種の繁殖」という目的があるために「すべての感覚に染み込む」²¹という性質を獲得している。従って、この世に創り出されるあらゆる文明はジェネジックの影響下にあるということになる。学問・文化(science)²²も同様に「すべての学問・文化の最も繊細で創意工夫のあるものは、男女の集まりに関係のある欲望、希望、感謝から生じている」²³ということから、ジェネジックの影響下にある。つまりジェネジックは、単に人間生命を生み出すだけでなく、人間にありとあらゆる文明や学問や文化を築かせ、それによって人間社会を進歩に導いていく、一種の莫大なエネルギーをもった感覚とみなされているのである。従ってジェネジックは「万物を創造し生成していく」という概念であるといえるだろう。

4. 動物と共通の本能の肯定

ではなぜブリヤ=サヴァランはこうした概念をもつジェネジックを味覚と結びつけて論じるのだろうか。まずは彼がジェネジックを感覚とみなす論拠をみてみたい。

個の保存が目的である味覚があきらかにひとつの感覚というならば、なおさらのこと、種の保存が目的である器官〔ジェネジック〕に感覚の地位を授けなければならない²⁴

この一節に示されているように、ジェネジックと味覚にはそれぞれ「種の保存」と「個の保存」という重要な目的が自然によって与えられているが、この2つの目的は次の一節にあるように、互いに関連しながら存在の根源を確保する。

諸感覚の全体系を概観すると、創造主が2つの目的をもっていったことがわかる。それは互いに相関する。つまり個の保存と種の保存である。これが感覚する存在とみなされる人間の宿命である。この2重の目的に人間のすべての行動は結びついている²⁵

人間の性的なことや食べることに関わる事項は、キリスト教的文脈においては常に抑圧の対象であったが、ブリヤ=サヴァランは、このように人間に備わる2つの動物的欲望を人間の本質と捉えて肯定していることがわかる。こうした思想は有名な冒頭のアフォリスムの第1番目に記されているといえるだろう。

生命が無ければ宇宙もない。そして生きるものはすべて自らを養う²⁶

このように、ブリヤ=サヴァランはジェネジックと味覚を極めて壮大な存在の連鎖の原点に置いて肯定するのである。しかしながら、ブリヤ=サヴァランのこの2つの感覚への関心は、こうした目的そのものに向けられているわけではないだろう。なぜならそれは動物にも共通の原始的な事柄だからである。彼の関心はむしろ、先の引用の最後の言葉にあるように「この2重の目的に人間のすべての行動は結びついている。」点にある。というのもこの2つの感覚は共に、その目的に到達する過程において、最も洗練された高尚な人類の文明や学問や文化を生み出すからである。

5. 人類の特徴をなす文明の礼賛

ジェネジックがその目的ゆえに文明・学問・文化に染み入る力を持つ感覚であることは既に述べた通りだが、味覚も同様の性質を持つとされている。「味覚の力」²⁷の節に記された次の一文をみてみよう。

肉体愛 [ジェネジックのこと] があらゆる学問・文化に染み込んだことは既に見た通りであるが、それは常にこの感覚の特徴をなすあの暴君性をもってなされる。味覚も積極的ではあるが、慎重で節度ある能力で、成功の永続性を確保する緩慢さをもって学問・文化にしみこんだのである。²⁸

従って、あらゆる文明・学問・文化は、ジェネジックと味覚の影響下にあるということになる。ただ、この2つの感覚が直接生み出す学問・文化は、とりわけ優美で繊細な美的なイメージを伴ったものとして描写される。ジェネジックの場合、第2章で引用した言葉にあるように男女の集まりを「美しくする」ことのできるあらゆるものを生みだし、すべての学問・文化の「最も繊細で創意工夫のあるもの」が男女の出会いに関係のある欲望、希望、感謝から生じるとされている。味覚の場合、例えば豪華な饗宴の大広間などは「鏡、絵画、彫刻、花々で飾られ、華やかな美しい婦人達、馥郁たる香気、響き渡る甘美な旋律で満たされる」²⁹ことからわかる通り、「あらゆる学問・文化が味覚の喜びを高めるために、また味覚を程よく際立たせるために貢献させられる」³⁰のである。つまり、生命を生みだし維持する最も動物的なこの2つの感覚こそ、人間を動物的なものから引き離す最も高尚で洗練された美的な文明・学問・文化を創り出していくのであり、これらの点において「創造と生成」の概念は共有されるのである。そしてそれは人類にふさわしい快樂の源泉となる点において重要なのである。ここで注意すべきは、この2つの感覚の学問・文化への影響のあり方の違いである。先の引用でジェネジックは「暴君的」、味覚は「緩慢」で永続的とされていた。ブリヤ=サヴァランは他の場面で「食卓の快樂には恍惚も忘我也興奮もない、そういう激しさがなにかわりに長く続けられる。」³¹と語っていることから、ジェネジックの暴君性とは、恍惚、忘我、興奮といった激しさを指すものと思われる。「極端は長く続かないのは自然の習い」³²などの記述から、ブリヤ=サヴァランは極端は永続性を損なうものとみなしており、味覚はその点でジェネジックより評価される感覚なのである。

6. 人間の知的諸能力の行使としての快樂

ブリヤ=サヴァランがジェネジックと味覚の美点を唱えるとき、単なる性的な快樂や食べる快樂はほとんど問題とされていない。なぜならそれは動物と共通の快樂だからである。彼の関心はあくまで人類の特性としての快樂である。このことを理解するために「食べる快樂と食卓の快樂の違い」の節³³をみてみたい。ここでは「食卓の快樂」(plaisir de la table) はそれに必ず先行する「食べる快樂」(plaisir de manger)と厳密に区別しな

ればならないことが述べられる。なぜならば「食べる快樂は欲望が満たされるために生じる現在的直接的な感覚」³⁴であり、「食卓の快樂は食事に伴う様々な事項、場所、もの、人などの様々な事情から生まれる反省された感覚」³⁵だからである。この2つの大きな違いは受容された感覚が「反省」されたかどうかという点にある。ブリヤ=サヴァランにおける「反省」とは第2章で見たように人類だけの属性である「精神」でなされるものであった。すなわち彼が関心を示すのは、感覚器官によって受容された感覚が、人間だけが有する精神を通過し、そこで反省、比較、判断がなされた結果生みだされるものであり、それこそが人類に利益や幸福をもたらす快樂なのである。それは人間の知的諸能力の行使の結果であり、時間とともに洗練されていく進歩の概念を伴った、人間の特徴をなす快樂である。従って、人類だけの快樂は、以下のように動物と共通の快樂と厳密に区別される。

食べる快樂は動物と我々に共通のもので、飢えを満たすのに必要なものがありさえすればよい。³⁶

食卓の快樂は人類だけのもので、食事の支度、場所の選択、会食者の招待など事前の様々な心遣いがなされるものである。³⁷

7. 快樂のあり方

ここでジェネジックと味覚の相違点をみてみたい。「味覚がそのきっかけとなる喜び」³⁸という節で、味覚は「諸感覚のなかで最も人間に多くの快樂を提供する」³⁹と述べられている。それは次のような6つの根拠⁴⁰によるものである。

- 1 食べる快樂だけは節制を持つてする限り疲れをとまなわない。
- 2 この快樂は時期、年齢、身分を問わない。
- 3 少なくとも必ず1日に1回はもたらされるし、1日に2、3回繰り返されても不都合はない。
- 4 他の快樂と交わることもできるし、他の快樂がないことを慰めてさえくれる。
- 5 その印象は他の快樂と比べて永続的で、我々の意志により依存する。
- 6 食べながらなんとも言えない特別な幸福を感じる。これは食べてさえいれば、我々の消耗を回復し、我々の命を伸ばすことになると本能的に意識することからくる。

注目すべきは、以上にあげられた根拠が「諸感覚のなかで」と断りつつも、実際はジェネジックとの比較になっていることである。ブリヤ=サヴァランにとってジェネジックと味覚は同じくらい重要ではあるが、味覚の方がより心地よく人間に快樂をもたらすこと、また学問に与える影響の永続性を確保することから、より礼賛すべき感覚なのである。

8. 味覚と人間の知性

こうして礼賛される「味覚」は、やはり人間の知性すなわち精神と深く結びつくものとして描写されている。「味覚の感覚の分析」⁴¹の節を見てみよう。例えば、彼は味覚を「直接感覚」(*sensation directe*)、「完全感覚」(*sensation complète*)、「反省感覚」(*sensation réfléchie*)の3種に分類している。「直接感覚」とは「味わいうる物体がまだ舌の前部にある状態ですぐになされる口腔の諸器官の活動によって生まれる最初の印象」⁴²、「完全感覚」とは「食べ物がはじめの位置を捨て、咽頭を通り、その味と香りですべての器官を打つときに生じる印象と、最初の印象とがひとつになった感覚」⁴³、「反省感覚」とは「器官から伝達された諸印象に精神が下す判断」⁴⁴である。最後に生じる「反省感覚」こそ、人間の知的諸能力の行使に他ならないだろう。なぜなら既に述べたように、反省や判断は人類だけの属性である精神でなされるものだからである。ブリヤ=サヴァランは例えば桃を食べる人がどのようにしてこの3種の感覚を感じるのか描写しているが、注目すべきは次の例のように飲み込んだ直後に言語を発する人間達の姿である。

ワインを飲み、それが口中にある間は心地よい印象を受けるが、完全には印象を受けていない。飲み終えて初めて本当に味わい、評価し、様々なワインに特徴的な香りを見出すのである。通が「美味しい、まずまずだ、まずい」と言ったり、「へえ、これは上等のワインじゃないか！おお、こりゃひどいワインだ！」と言ったりするのに、少しの時間の間隔が必要なのである。⁴⁵

人類の知性の象徴である言語が、食べたり飲んだりした直後、すなわち精神で反省、比較、判断させられた直後に発せられる姿は、味覚と人間の知性の深い関係性を示す描写に他ならないだろう。同じ食べる行為でも美食行為はさらに高尚な人間の知性が要求されるものとして描かれる。「本格的なグルマンディーズの実例」の章⁴⁶で理想とされる美食家ポローズ氏の美食は物質より精神にかかっている。彼が招待する会食者たちは、哲学的な注意をもって味わい、理性をもって食欲を制す人々である。招待客の人数や料理は予め入念に考え抜かれたもので、心を込めた給仕がなされる。貧乏だが優秀な学者が招かれ会話の主題を提供し、男女の席は上手に配置される。ブリヤ=サヴァランは経験や予測を駆使した美食家のこうした配慮に高い関心を寄せている。一般に配慮とは、注意、反省、推論、想像力、判断といった人間の高度な精神の諸機能が要求されるものであろう。彼は別の場面で社交の美食における一般のおきてとして「高い知性から生じるあらゆる案配には明白な称賛が必要」⁴⁷と述べている。そしてこうした気持ちに対しては「常に繊細な賛辞が寄せられなければならない」⁴⁸と記している。ブリヤ=サヴァランにとって配慮とは高い知性に基づくものであり、それに対する美食家たちの言語は常人のものよりも繊細なのである。このように、味覚は最も動物的な欲望でありながら、人間の知性と深く結びつき、人間を動物的なものから引き離す感覚として叙述される。ここでブリヤ=サヴァランがいかに味覚をもって動物から人間を引き離すのかを簡単にみておきたい。それは冒頭のアフォリズムの第2番目に記されている。

動物は食い、人間は食べる。教養のある人間だけが食べる術を知っている⁴⁹

「料理術の哲学的歴史」⁵⁰の章では、人間ははじめ「雑食獣」(animal omnivore)として語られる。門歯で果実を食い割り、臼歯で穀類を引き砕き、犬歯で肉を引き裂いている。だが人間は、味覚を出発点として優美で洗練された、そして高度で複雑な文明・学問・文化を築き上げ、時間をかけて物質的かつ精神的な進歩を遂げていく。また「人間の至上権」⁵¹の節では、人間の味覚が動物に比べいかに優れているかが語られる。知性に相応して動物の舌はたいしたことはないが、人間の舌はその組織が繊細で完成されており、さらに味覚は「中枢」⁵²すなわち人間だけの属性である「精神」で評価されるべきものであるため、その印象は人間と動物では比較にならない。従って、美食は「人間特有のもの」⁵³とされる。第1章で記したように「諸感覚の使用」の節で「味わわずに食った」と描写されていた初期の人類は「精神」を駆使し「自然界一の美食家」⁵⁴と宣言されるに至るのである。

9. 自然の秩序

それではなぜブリヤ=サヴァランは、これほどまでに人類の特徴をなす文明・学問・文化を創り出すジェネジックと味覚を礼賛し、味覚をもって人間を動物的なものから引き離そうとするのだろうか。このことを理解するためには、彼が多くの時を過ごした18世紀が自然の秩序付けを試みる博物誌の時代であったことを想起する必要がある。自然の体系のなかでリンネ (Carl Von Linné, 1707-1778) は人間を四足獣に分類し、ビュフォンも動物の部類に分類した。こうしたなかで人間の位置づけが模索された。ビュフォンは博物学者として人間を動物の部類に分類はしたが、人間を貶めることなく、⁵⁵創造されたあらゆるものの頂点におき「もっとも完全な生物からもっとも形の定まらない物質へ、もっとも有機的組織が整った動物からもっとも粗雑な鉱物へと、ほとんど知覚しえない段階をたどって下降していく」⁵⁶秩序を描いた。ブリヤ=サヴァランが精神の存在を重視していたことは見てきた通りだが、ビュフォンは人間の精神について次のように述べている。

なぜ人間の博物誌からその存在のなかで一番高貴な部分を削除しようとするのか。なぜ人間という存在を不適切に貶め人間を動物のみと考えねばならないのか。実際には人間は動物とはまったく異なり、はるかに

際立った、極めて高等な本性をもつのに⁵⁷

コンディヤック (Étienne Bonnot de Condillac, 1714-1780) は1755年に出版した『動物論』でビュフォンを次のように攻撃した。

(ビュフォンのように)動物と人間の比較を通して人間の本性が理解できると想像してはならない。そこで我々が発見しうるのは人間の本性ではなく諸機能だけであるから。比較という手段は人間の諸能力を観察する優れた指針となりうる。⁵⁸

『味覚の生理学』はこうした流れに対応しているように思われる。敬愛するビュフォンの思想を継承しつつも、コンデンディヤックの流れを汲む観念学派の影響も受けた⁵⁹ブリヤ=サヴァランが動物と比較して明らかにしようとしているのは人間の本性というより人間の諸機能あり諸能力である。興味深いのはブリヤ=サヴァランがビュフォン同様自然界の秩序づけを行っていることである。ただし彼は自然界の秩序づけを味覚と関わる観点を基準に行っているのであり、それは極めて独創的といえよう。「有機体はみな同じように栄養をとるわけではない。」と彼は言う。⁶⁰

植物は生物のなかで下位にあるが、根によって栄養をとる。⁶¹

それよりやや上位のものを見ると、動物的生命は与えられているが、動きが制限された有機体がある。彼らは自分の生存に都合のよい環境に生まれる。そして特殊な器官が、そこから彼らの生活と持続に必要なもののだけを引きよせる。⁶²

宇宙をかけめぐる動物たちの存続のためには、また別の栄養摂取の方法が課せられた。それら動物の中で人間が最も完全なものであることはいままでもない。⁶³

このように最も完全に栄養を摂取する方法を獲得し、「自然界一の美食家」となった人間は、ブリヤ=サヴァランにとって、自然の秩序の頂点におかれるべき存在なのである。

10. おわりに

我々は『味覚の生理学』でとりわけ重要とみなされている「ジェネジック」という感覚をとりあげ、なぜこの感覚が味覚と密接に捉えられるのかを考えることによって、ブリヤ=サヴァランの味覚の思想を明らかにすることを試みた。ジェネジックは (genèse) から派生させたブリヤ=サヴァランの造語で「創造と生成」の概念がこめられたものであった。なぜなら彼にとってジェネジック、つまり人間の性的欲望は、生命を創造するのみならず、あらゆる文明・学問・文化を創造し、それによって社会は生成され、進歩に導かれるからであった。ジェネジックと味覚が強く結びつけられるのは、2つの感覚が「種の保存」と「個の保存」という目的において互いに相関しながら存在の根源を確保するだけでなく、これらの最も動物的感覚こそ、動物から最も人間を引き離す、高尚で美的な文明や文化を創造し、それによって人類の特徴をなす知的で洗練された文明社会が生成されるからであった。つまりジェネジックと味覚は「創造と生成」の概念を共有しているのであった。こうした思想において人類の属性である「精神」は要であった。精神で反省、比較、判断がなされた結果生み出される繊細な文明・学問・文化は、人類の特徴をなす快樂とみなされており、動物と共通の快樂とは厳密に区別されるべきものであった。また、学問への影響の永続性や快樂のあり方といった点からみると、ブリヤ=サヴァランにとって味覚はジェネジックより評価すべき感覚であった。そうして語られる味覚はやはり人類の知性つまり精神と深く結びつく感覚として描写されているのだが、博物誌の世紀に多くの時を過ごしたブリヤ=サヴァランは、動物の部類に分類された人間の味覚における諸能力や諸機能の優位を明らかにすることによって、人間を動物から引き離

し、人間を頂点とする自然の秩序を描いているといえた。このようなブリヤ=サヴァランの味覚の概念について、より深い考察を行うためには、彼が影響を受けた18世紀の観念学派との関係を明らかにする必要があるが、それは今後の課題としたい。

【註】

*ブリヤ=サヴァラン、ビュフォン、コンディヤックのテキストは既訳を見直し必要に応じて翻訳しなおした。

1. Jean-Anthelme Brillat-Savarin, *Physiologie du goût, ou Méditation de gastronomie transcendante : Dédié aux gastronomes parisiens par un professeur*, Paris : Flammarion, 1982 (1825), 略記法PhG. [ブリヤ=サヴァラン『美味礼賛』関根秀雄・戸部松美訳、岩波書店、(上) 2016年、(下) 2015年]
2. *Ibid.*, pp.39-40 [同書 (上)、51-52頁]
3. *Ibid.*, p.39 [同上、51頁]
4. *Ibid.* [同上]
5. Georges-Louis Leclerc, comte de Buffon, *Histoire naturelle de l'homme*, in : *Œuvres complètes de Buffon, nouvelle édition, tome onzième*, Paris : Librairie Abel Pilon, 1884-1885, p.133
6. *Ibid.*, p.137
7. PhG., p.36 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書 (上)、43頁]
8. Buffon, *op.cit.*, p.28
9. Brahimi Denise, *La sexualité dans l'anthropologie humaniste de Buffon*. in : *Dix-huitième siècle, Représentations de la vie sexuelle, sous la direction de Peter Gay*, no 12, 1980, pp.113-126
10. PhG., pp.44-46 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書 (上)、58-60頁]
11. *Ibid.*, p.45 [同上、60頁]
12. *Le Trésor de la langue française informatisé*, <http://www.cnrtl.fr/definition/genesique> (2017.08.30入手)
13. PhG., p.37 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書 (上)、44頁]
14. *Le Dictionnaire historique de la langue française, s. l. d. d'Alain Rey*, Paris :Dictionnaire le Robert, 1992, p.880
15. PhG., pp.40-41 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書 (上)、52-54頁]
16. *Ibid.*, p.40 [同上、52頁]
17. *Ibid.* [同上]
18. *Ibid.* [同上]
19. *Ibid.* [同上、53頁]
20. *Ibid.*, p.41 [同上]
21. *Ibid.*, p.40 [同上]
22. ブリヤ=サヴァランは、複数形のsciencesを「学問」というよりも「学問を含めた文化一般」という広い意味で用いているため、「学問・文化」と訳した。
23. PhG., p.41 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書 (上)、54頁]
24. *Ibid.*, p.40 [同上、52頁]
25. *Ibid.*, pp.44-45 [同上、59頁]
26. *Ibid.*, p.19 [同上、23頁]
27. *Ibid.*, p.44 [同上、58頁]
28. *Ibid.* [同上]
29. *Ibid.* [同上]
30. *Ibid.* [同上]
31. *Ibid.*, p.171 [同上、239頁]
32. *Ibid.*, p.266 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書 (下)、106頁]
33. *Ibid.*, pp.170-171 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書 (上)、238-239頁]
34. *Ibid.*, p.170 [同上、238頁]
35. *Ibid.* [同上]
36. *Ibid.* [同上]
37. *Ibid.* [同上]

38. *Ibid.*, pp.55-56 [同上、72-74頁]
39. *Ibid.*, p.55 [同上、73頁]
40. *Ibid.*, pp.55-56 [同上、73-74頁]
41. *Ibid.*, pp.52-54 [同上、69-71頁]
42. *Ibid.*, p.52 [同上、70頁]
43. *Ibid.* [同上]
44. *Ibid.*, pp.52-53 [同上]
45. *Ibid.*, p.53 [同上]
46. *Ibid.*, pp.285-296 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書(下)、132-145頁]
47. *Ibid.*, p.147 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書(上)、204頁]
48. *Ibid.* [同上]
49. *Ibid.*, p.19 [同上、23頁]
50. *Ibid.*, pp.251-276 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書(下)、85-131頁]
51. *Ibid.*, pp.56-58 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書(上)、74-77頁]
52. *Ibid.*, p.58 [同上、76頁]
53. *Ibid.*, p.57 [同上]
54. *Ibid.*, p.58 [同上、77頁]
55. ジャック・ロジェ『大博物学者ビュフォン 18世紀フランスの変貌する自然観と科学文化誌』、ベカエール直美訳、工作舎、1992年、186-187頁
56. Georges-Louis Leclerc, comte de Buffon, *Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roy, tome premier*, Paris : L'imprimerie Royal,1749-1788, p.12
57. Buffon, *op.cit.*, p.5
58. Étienne Bonnot de Condillac, *Traité des animaux*, in : *Œuvres de Condillac ; exemplaires imprimés, annotés et corrigés par l'auteur pour une nouvelle édition. XVIIIe siècle. IV-V Traité des animaux*, NAF 11102, 1776, p.1 [エティエンヌ・ド・ボノ・ド・コンディヤック『動物論 デカルトとビュフォン氏の見解に関する批判的考察を踏まえた、動物の基本的諸能力を解明する試み』、法政大学出版局、2011年、1頁]
59. ブリヤ=サヴァランとその主著『味覚の生理学』は、フランス美食文化の文脈で言及、引用されることは度々あるが、専門的な研究はほぼ手付かずである。18世紀観念学派の影響についてはフランソワ・ピカヴェ(*Les idéologues*, Félix Alcan, 1891)、近年ではパスカル・オリイ(«*Brillat-Savarin, dans l'histoire culturelle de son temps*», in, *Gastronomie et identité culturelle française; Discours et représentations (XIX^e-XXI^e siècles)*, Nouveau Monde édition, 2009) 橋本周子(『美食家誕生・グリモと〈食〉のフランス革命』、名古屋大学出版会、2014年)など幾人かの研究者によって指摘がなされているところである。
60. PhG. p.46 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書、61頁]
61. *Ibid.* [同上]
62. *Ibid.* [同上]
63. *Ibid.*, p.47 [同上、62頁]